

霞

—2013年度夏季展示室だより—

土浦市立博物館

平成25年7月2日発行(通巻第24号)

当館では「霞ヶ浦に育まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころをご紹介します。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

古写真・絵葉書にみる土浦(24) 古写真 「土浦駅構内の売店」



目次

- 古写真・絵葉書にみる土浦(24)・・・1
- 博物館からのお知らせ・・・1
- 【夏休みファミリーミュージアム他】
- 墨書土器「国厨」(古代)・・・2
- 霊戒(珂月)和尚像(雪蕉筆)(中世)・・・3
- 立原杏所画「土浦侯深川別園図」(近世)・・・4
- 読み解き「土浦御祭礼之図」①(近世)・・・5
- 駅弁にみる霞ヶ浦の名産品(近代)・・・6
- 市史編さんだより・・・7
- 霞短信「ようこそ!土浦」・・・8
- コラム(24)・・・8
- 情報ライブラリー更新状況・・・8

大正11(1922)年頃、土浦駅にあった福見商店の売店です。明治時代の鉄道開通後から、土浦駅構内では、説田良三郎・山本真次郎・福見善助の三氏が営業を許可されて、駅弁や雑貨を販売していました。二人の駅弁売りの右手にあるのは、当時発売されたわかさぎ弁当です。【情報ライブラリー検索キーワード「土浦駅」】

博物館からのお知らせ

★★館長講座(茂木雅博館長)★★ 会場:博物館視聴覚ホール

7月21日(日)・8月18日(日)・9月22日(日) 各日とも午後2時~(1時間30分程度)

「世界遺産を目指して」と題し、筑波山麓と霞ヶ浦周辺の遺跡についてお話しします。

【夏休みファミリーミュージアム】

★★ミニ掛軸をつくろう★★

第1日目 8月2日(金) 9:30~午前中

第2日目 8月10日(土)または11日(日) 9:30~15:00

★★親子はたおり教室★★ 往復葉書で8/7までに申込み

8月23日(金)・24日(土) 午前の部 10:00~12:00 午後の部 13:30~15:30

★★親子史跡めぐり★★

とき 8月8日(木) 午前9時~午後5時(小雨決行) 大人500円、小中生300円

行先 笠間方面 7月17日(水)から申込み受付・定員35名

★★ワンポイント解説会★★ 夏季展示の見どころをわかりやすくご説明します。

7月27日、8月3日、8月10日、8月17日、8月24日(いずれも土曜日) 14:00~

クイズラリーも開催します。合格者(80点以上)には記念品のプレゼントがあります。

★祝日開館★ 7月15日(月)、9月16日(月)、9月23日(月)

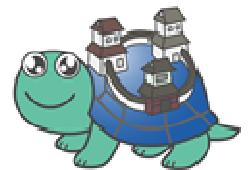
★休館日★ 毎週月曜日(7月15日・9月16日・23日を除く)、7月16日(火)、9月17日(火)、9月24日(火)

★スタンプカード発行のお知らせ★

イベントに参加された方にスタンプカードをお渡しします。集めたスタンプの数に応じて記念品をプレゼント!

7/20~スタート

(詳細はお問い合わせください)



博物館マスコット
亀城かめくん

※お知らせ欄の行事・日程は一部変更となる場合がございます。

くにのくりや

墨書土器「国厨」

— 国府の食器として —

今回ご紹介する資料は、市内の長峯遺跡から出土した平安時代前期（9世紀）の素焼きの盤形土器で、高台の付いた底の表面に「国厨」の文字が手慣れた筆法で墨書されています。盤は食物を盛る器で、本資料は丸い皿の形をしています。

松尾昌彦氏の研究によると、「厨」の文字が書かれた墨書土器は東日本では52の遺跡から発見されています。茨城県内では長峯遺跡出土例の他、鹿嶋市宮中の神野向遺跡（鹿島郡衙跡）出土の「鹿厨」・「厨」銘墨書土器、石岡市貝地の茨城廃寺跡（茨城郡の寺跡）出土の「国厨」・「厨」銘墨書土器、水戸市大串町の大串遺跡（那賀郡衙関連遺跡）出土の「厨」銘墨書土器を検討し、紹介しています。

松尾氏はこのような「厨」銘墨書土器を出土する遺跡を、官衙（国府や郡衙：古代の国や郡の役所）と考えられる遺跡、官衙に隣接し密接に関連する遺跡、集落内に寺院を持つような官衙とも関わり深い拠点的な集落、類例は少ないが一般的な集落、以上四つに分類し、出土遺跡の8割を超える多くが何らかの形で古代の役所と関係することを明らかにしています。

つまり「国厨」は国府の厨（台所）の意味で、古代の国の役所にあつて食事の供給や食料・食器の調達、収納管理を行っていたものと思われます。そういう意味でこの皿も、常陸国府の厨において収納管理されていた食器であり、墨書はそれを明示するものだったのです。当時は国府や郡衙などの役所にある厨が食器供給施設としての役割も果たしており、国府や郡衙だけでなくその関連施設などの行事や接客の際、「厨」銘墨書土器が国司や郡司などの役人をもてなす膳に供されていたと思われます。



長峯遺跡から出土した「国厨」銘墨書土器

当館所蔵

※なお、墨書の国の字は「國」と思われる。

長峯遺跡は、霞ヶ浦の土浦入り北岸に位置する田村・沖宿遺跡群にあり、寺の堂跡と思われる掘立柱建物跡が見つかっており、「長谷寺」という墨書土器も出土しています。また、この遺跡群からは、一般の集落遺跡では発見例の少ない二彩、三彩、緑釉などの高級陶器も発見されています。長峯遺跡は、常陸国府から南に14kmほど隔てた位置にありますが、「国厨」銘墨書土器の出土や上記のような遺跡の様相から鑑みて、国府との密接な関係が容易に想定されます。国司（常陸国の役人）巡行の際、その一行をもてなすための饗饌の施設を備えていたのではないかと考えられます。

（塩谷 修）

※松尾昌彦『古代東国地域史論』雄山閣 2008年をご参照下さい。

8/3（土）午後2時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも古代コーナーに展示）

- 長峯遺跡出土墨書土器「長谷寺」
- 寺畑遺跡出土墨書土器「千手寺」



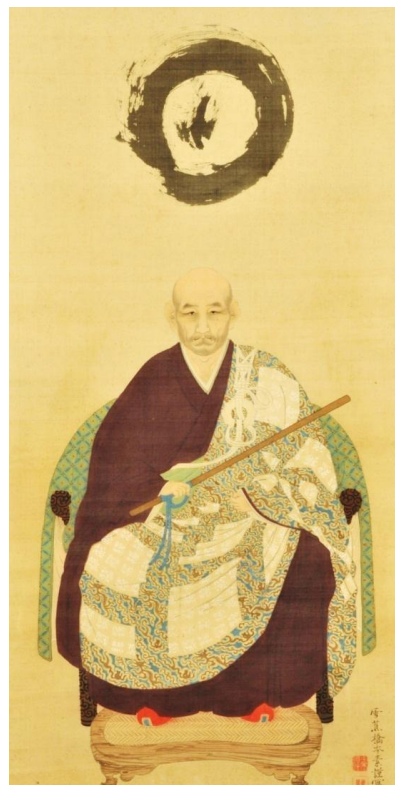
れいかい かげつ せっしょう
靈戒（珂月）和尚像（雪蕉筆）

さいがんじ
—東崎町 濟岸寺の住職—

法雲寺第40世靈戒和尚（1808～1887）は、珂月禪師ともいい、能書家で和歌にも長じた碩学高德の名僧として知られています。『近世土浦小史』（明治39年刊）によると、珂月は文化7（1810）年（文化5年の誤りか）に江戸板橋の市川家に生れ、島村（現深谷市）長福寺で仏門に入ったとされています。また、安政5（1858）年に上洛して公卿たちと交わり、近衛公の猶子となって従四位を授けられ、後に法雲寺の住職となったと記されています。近衛公が誰を指すのかは定かではありませんが、公武合体派として活動した近衛忠熙（1808～1898）のことと思われ、法雲寺には忠熙の書をはじめ他にも近衛家伝来の書が伝わっています。

この肖像画は、橋本雪蕉（1802～1877）が描いたものです。雪蕉は明治元（1868）年まで江戸で名声を博しており、明治3年に八戸に移っています。おそらくこの2年余りのうちの一時を法雲寺で過ごして珂月の肖像画や「法雲寺境内図」（「霞」第23号）を描いたものと考えられます。よって、この肖像画は珂月60代初めの姿を描いたものといえるでしょう。袈裟をまとして曲棗に坐し、竹篋を持って正面を向いた姿で、容貌は耳が大きく、厚い唇を引き締め、頬がやや痩けて、無精髭を生やし、眼光が鋭く描かれています。また、肖像画の上部には珂月直筆の、禅という悟りの象徴である円相が描かれています。表装裏の上部には「円相ハ禪師直筆 珂月禪師頂相 三十回忌之辰改装 中 法要係釋義堂 小松鶴翁」との墨書があります。昭和11年、珂月の50年忌にあたっては『珂月禪師歌集』（釋義堂編、小松鶴翁筆）が編纂刊行されており、和歌のほか漢詩25篇が収められています。晩年は東崎町の濟岸寺に隠棲し、明治20（1887）年12月19日に入寂して法雲寺に葬られました。

一方、濟岸寺には土浦藩の藩校郁文館の督学であり、10代藩主土屋黄直の侍講でもあった中田平山（1813～1887）の墓があります。明治政府が樹立された時、新政府と反政府のどちらに従うかについて、土浦藩も全国の諸藩同様に意見が分かれました。これを一つにまとめ、新政府側に恭順させたのは平山の活躍が大きかったとされています。珂月と近衛家の関係や、珂月と平山が同世代であったことなどを考えると、両者の政治的交友関係が想像されます。珂月は現在のところ明治歌壇の一人として知られているのみで、実はその足跡がほとんど分かっていない人物でもあります。珂月には書や詩歌のほかに、もっと別の側面があったのかも知れません。（中澤達也）



靈戒和尚像（雪蕉筆） 法雲寺所蔵

8/10（土）午後2時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（中世コーナーに展示）

- 小田氏治肖像
- 南禅真浄和尚像（雪蕉筆）
- 梅溪（39世）和尚像
- 靈戒（40世）和尚像（雪蕉筆）



たちばらきょうしよ つちうらこうふかがわべつえん ず
立原杏所画「土浦侯深川別園図」

—江戸にあった土浦藩の御屋敷—

土浦城は周辺の領地を治める拠点でしたが、藩主が常に住んでいたわけではありません。江戸時代の大名に参勤交代があったことはよく知られていますが、すべての大名がしていたわけではなく、江戸周辺に居城をもつ親藩や譜代の大名は、定府といって江戸に常住し、時折国元に帰っていました。土浦藩主土屋家も定府の大名です。それでは、藩主は江戸のどこに屋敷をもっていたのでしょうか。

土屋家は、歴代藩主のうち2名が老中を、3名が寺社奉行をつとめるなど、幕府の要職についていたこともあり、役屋敷（役宅）を拝領してはたびたび屋敷を移っています。なかでも長く拝領していた屋敷は、小川町（現千代田区神田）屋敷（寛延2<1749>年～文久3<1863>年の114年間）、そして本所小名木川（現江東区森下）屋敷（元禄6<1693>年～明治4<1871>年の178年間）でした。

小名木川屋敷は二代藩主政直（1641～1722）が老中在職中、大久保忠朝、阿部正武、戸田忠昌ら同役の老中とともに小名木川沿いにそれぞれ一万坪ずつを拝領したものです。この屋敷には下級の藩士らが住む長屋と、川の水を引き込んだ回遊式庭園がありました。藩主は通常、小川町屋敷など江戸城に近い屋敷に居住していましたが、老中を30年余りつとめ、藩領を拡大させた政直が拝領した屋敷として、以降の藩主はもちろん藩士たちも小名木川屋敷を重視し、庭園を整備し川沿いの美景を愛でていました。現在この屋敷の跡地に建つ墨田区立墨田工業高等学校と深川第一中学校の敷地は、幕末に刊行された「本所深川絵図」の「土屋采女正（寅直）」屋敷の地形とほぼ一致します。

美観をほこった庭園の名残が「土浦侯深川別園図」です。文政2（1819）年、立原杏所（1785～1840）画と落款があります。杏所は水戸藩の儒者立原翠軒の子で、名を任、字を子遠、甚太郎、のちに任太郎と称しました。当時、水戸藩主は徳川斉脩（1797～1829）で、土浦藩主は土屋彦直（1798～1847）でした。実は彦直は徳川治保の三男で、斉脩の父治紀は彦直の実兄にあたります。彦直と斉脩とは生年こそ一年しか違いませんが、叔父、甥の関係です。自慢の庭園に斉脩を招き、従ってきた杏所にその風景を描くことを頼んだのではないのでしょうか。水戸藩士であった杏所は画家として名を馳せていましたが、画業で禄（給与）をもらっていたわけではないので、頼まれなければ描かなかったはずなのです。

描かれているのは「碩軸館」と名付けられた小庵で、碩軸とは優れた人物の書のことで、数多くの美景がある小名木川屋敷の庭園において、池に突き出した小さな庵の絵を望んだ彦直の風雅を今に伝えています。天保9（1838）年、眼病のため長子寅直に家督を譲った彦直は、小名木川屋敷を隠居の地に選び、弘化4（1847）年に没するまでここで過ごしました。（木塚久仁子）



「土浦侯深川別園図」当館所蔵

8/17（土）午後2時から
このページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。

- 松本剣志郎「土浦藩江戸屋敷について」（『土浦市立博物館紀要 第23号』）（受付にてご覧になれます）
- 土屋彦直書「両水夾明鏡」 ●土屋彦直書「鶴亀」（いずれも近世コーナーに展示）



つちうらごさいれいのず
読み解き「土浦御祭礼之図」①

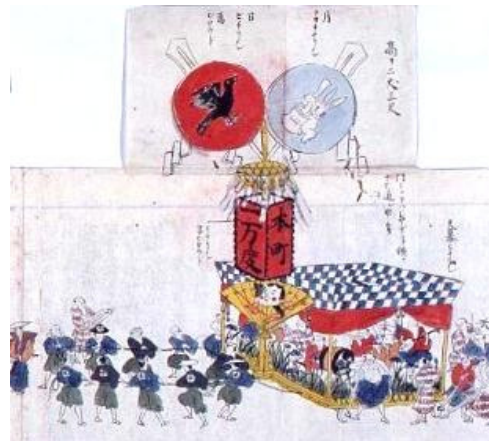
—町組の出し物から考える—

土浦城下の祭礼を描いた資料に文化9（1812）年の「土浦御祭礼之図」があります。仮装した町人による朝鮮通信使や大名行列、桃太郎や竜宮城を表した万度（1本柱に行灯と装飾をつけた造り物）などが描かれたものです。今号から数回に分けて、祭礼図をもとに城下町の祝祭空間に思いを馳せてみたいと思います。

まずは祭礼図の前半部分を見てみましょう。神輿に続いて最初に登場するのは東崎町の出し物で、底抜け屋台のなかに三体の獅子頭とそれを操る人が描かれています。「三匹獅子舞」は東日本に広く分布する民俗芸能ですが、茨城県は獅子頭を棒につけて操る棒ササラがみられる特異な地域です。本資料はその棒ササラを描いたものと推測されます。



続く本町では三本足の鳥と餅つきをする兎を描いた高さ4.5mもの巨大な万度をつけた屋台が登場します。鳥は太陽を、兎は月をあらわし、その下には天ノ鉦女命をイメージさせる造り物がみられます。神話の世界をあらわしたものでしょうか。



次の中町では3つの大きな酒樽をのせた万度とともに朝鮮通信使の仮装行列をだしました。通信使は将軍の代替わり時に江戸へやってきた使節団で、江戸の人々が異国の文化にふれる機会でもありました。通信使の仮装は江戸の祭りでも行われており、土浦の人々も江戸を真似て、異国イメージを仮装行列で表現したようです。

「土浦御祭礼之図」 当館所蔵
東崎町（上）と本町（下）

中町の後には田町が続くはずでしたが、前年におきた大火が原因で「弥勒の出し（山車）」を行列に参加させることができませんでした。「弥勒」とは未来に下界へ下って人々を救うとされる弥勒菩薩のことで、江戸庶民には世直しや豊穰をもたらす仏として信仰され、浸透していました。

続いては横町の大名行列の仮装です。身分秩序の厳格な江戸時代にあって、町人が武士の格好をして練り歩くことは、祝祭の空間を大いに盛り上げるものだったことでしょう。

さて、これらの町組の出し物についてですが、東崎町の名主をつとめた太田家の文書に元禄期と思われる祭礼の記録があり、ご紹介した祭礼図よりも100年近く前の町ごとの出し物が分かります。それによると東崎（東崎）は「獅子ささら」、田町は「みろくおどり」、横町は「作り武士」で、文化9年の祭礼図の出し物と共通する要素をもっていることが分かります。町組の出し物はある一定のテーマで踏襲されてきたようです。その一方、中町は元禄期には「獅子舞」を出していたのが「朝鮮通信使」に変わっています。長い伝統と最新の祭り文化が融合したのが「土浦御祭礼之図」に描かれた世界だと考えます。

（萩谷良太）

8/24（土）午後2時からこのページでご紹介した資料のワンポイント解説会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。（いずれも近世コーナーに展示）

- 「墨僊漫筆之稿」
- 「心得書」（太田家文書）



駅弁にみる霞ヶ浦の名産品

—明治時代のおもてなし—

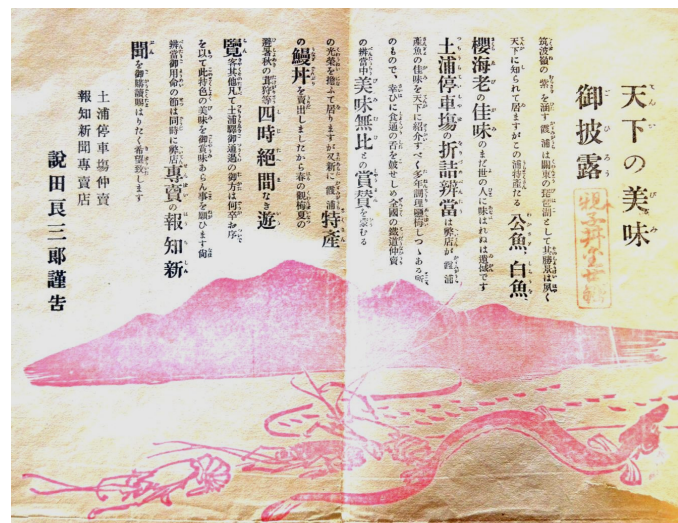
以前、「霞」第1号のなかで、駅でお弁当と一緒に売られたお茶の容器「汽車土瓶」をご紹介しました。今回は主役といえるお弁当に注目してみたいと思います。

土浦に鉄道が敷かれたのは明治28(1895)年のことで、土浦-友部間に日本鉄道土浦線(のちの常磐線)が開通し、翌年に田端まで延長されました。『土浦駅史』によると、土浦での駅弁の構内販売は明治32年からで、最初に許可されたのが説田良三郎氏(説田商店)、続いて同33年に山本真次郎氏(山本弁当店)、35年に福見善助氏(福見商店・富久善)と続きました。開業当時の駅弁は、竹皮包で中に梅干、しその実を入れた握り飯(17銭)、寿司(10銭)、明治38年頃は上弁(35銭)・並弁(20銭)という品ぞろえだったようです。お弁当の中身が気になるところです。

明治時代の弁当かけ紙「上等御弁当」(写真①)と弁当チラシ「天下の美味御披露」(写真②)には、筑波山と霞ヶ浦を背景に、①にはエビ、シラウオやハゼと思しき魚が、②にはウナギとエビが大きく配されています。また、②には「この浦特産たる公魚、白魚、桜海老の佳味」を使った「折詰弁当」と新発売の「鰻弁」の紹介文があり、霞ヶ浦の特産品を活かしたお弁当だったことがわかります。チラシには「春の観梅 夏の避暑 秋の茸狩等 四時絶え間なき遊覧客其他凡て土浦駅御通過の御方は何卒お序を以て此特色ある美味を御賞味あらん事を願ひます(ルビも原文どおり)」と続きます。霞ヶ浦の産物は土浦の名産品に加工され、旅人へのもてなしとなりました。

霞ヶ浦の漁業生産は年々減少しながらも、現在、全国湖沼漁獲量の11.4%(2,218トン)を占めています(平成22年度調、『霞ヶ浦北浦の水産』より)。昨年の富久善の構内販売廃業を最後に、残念ながら土浦駅の駅弁はなくなりましたが、霞ヶ浦の名産品を味わう機会が絶えないことを期待したいと思います。

(野田礼子)



左から
① 「上等御弁当」
② 「天下の美味御披露」
(いずれも当館所蔵)

7/27(土) 午後2時から
このページで紹介した
資料のワンポイント解説
会を開催いたします。

下記の資料もあわせてご覧ください。(いずれも近代コーナーに展示)

- 「霞浦の美味御披露」(当館所蔵)
- 汽車土瓶 (汐留遺跡出土 東京都教育委員会所蔵)



市史編さんだより

いろかわみなか —色川三中をめぐる土浦町の歌友たち—

土浦市立博物館の研究室で長年にわたって解説を行ってきた『家事志—色川三中・美年日記—』には、時たま和歌が登場します。三中・美年兄弟はもう一人の弟御蔭とともに和歌を好み、特に三中が田宿の本宅の薬種商を美年に譲って川口蔵に引っ越し、醤油醸造に専念しながら国学に身を入れるようになった頃から、川口で盛んに歌会を開いたようです。

今回はこの色川三中家に伝わり、現在は土浦市の指定文化財になっている土浦市立博物館所蔵の色川文庫の中から、土浦町で行われていた歌会の様子、またその時代をご紹介します。

この色川文庫の目録は平成23年3月に刊行された『土浦の文化財関係史料集』の中に収録されています。歌会に関する記録が何点か含まれていますが、歌会に参加した人々の名前まで明細に書き上げてあるものもあります。それを見ると、現石岡市小井戸の江橋家から迎えた三中の三人目の妻「竹」が川口へ来てから、女性も参加するようになったようです。

三中がまだ若かった二十代後半の頃にも、盟友である龍ヶ崎市川原代の細井玄庵（篤）の妻から歌を詠みかけられて、上手にお返しが出来ませんと断りの歌を詠んだなどの記述はありましたが、土浦町で女性達が盛んに歌会に参加するという事例は『家事志』には登場しませんでした。しかし短歌・俳句という文芸は、手軽な上に座会という皆が一堂に会しての切磋琢磨の世界であり、庶民にも普及し易かったのでしょう、幕末と言われる嘉永年間(1848～1853年)頃から土浦町でも盛んになっていたようです。『家事志』の周辺では三中の国学への傾倒もあって、和歌の好きな人達が集まったのかもしれませんが。

古代では宮中での歌会、そして公家から武家へと権力が移るにつれて武士も和歌をたしなみ、平家の武将薩摩之守忠度や將軍源実朝などは歌人としても有名です。江戸時代に入って更に庶民にも浸透し、土浦の町家の女性達にまで親しまれるようになってきたのは、時代の流れなのでしょう。

嘉永元年から4年頃の歌会を記録した「呉竹集」(色川文庫58)の中に

ゆかしさにひかれよりくるつまことに たたまくおしきやとはこのやと かね子(真鍋 田辺や妻)
素敵な御家だなあとつい伺いたくなり、来ると帰りたくないと思うのがこの御家ですね、とあり、
いく千秋幾よろつ代も老せじと 君をことふく喜久(菊)の盃 久子(真鍋 堺屋仁兵衛妻)
こちらは歌友の集いの楽しさを重陽の節句によそえて詠んでいます。

また「菊」という題で

かにおふまかきの菊も有ものを 老せぬくすり何もとむへき 幸枝(中城 河田正三郎)
まちわひしにはのしら菊さき初て はや長月のけふとなりけり 竹子(三中妻)
なか月のけふつむ花はもろひとの としわかゆてふしら菊の花 みかけ(色川御蔭)

の歌があり、次いで

くさまくら旅のなかにいてゝあれは いつしか空にかりかねのなく みそき(身潔 中城町名主 入江善兵衛)

題は「旅宿雁」と続きます。美年・三中の歌は

おりしもあれ袖の時雨もふる里の 空なつかしく渡る雁かね みとし(色川美年)
明やらぬ夜をわひつゝもあるものを いまはやめてよこほろきの声 (三中)

です。秋の盛りから晩秋へと移ろう風物や叙情を共感しながら歌会を楽しんでいた様子がうかがえます。

この「呉竹集」と同時代に三中が川口で記録していた日記「戊申」と「辛亥」が来春発刊される最終巻の『家事志 第六巻』に収録予定です。是非手にとってご覧いただきたいと思います。

(社会教育指導員 村松常子)

霞 短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、第34回特別展の広報にご協力いただいた「キララちゃんバス」についてです。

「ようこそ！土浦」

博物館が特別展「^{はま}婆羅たちの武装」を開催することとなり、斬新かつ魅力あるこのイベントに、関係者ばかりでなく商業者も市民も胸を躍らせた。我々NPOでもこの特別展を応援しつつ、土浦を盛り上げる術はないものか思案した。

中心市街地活性化を目的として運行している「キララちゃんバス」もおかげさまで乗降数100万人を突破し、市民の足として定着してきた。乗客の皆さんに季節感を味わって頂こうと、バス車内の装飾とボディラッピングをシーズンごとに変更している。昨年暮れには、イメージキャラクター「キララちゃん」がサンタクロースに変身し、大好評を頂いた。年明けの2月には、キララちゃんをお雛様に見立てたラッピングにする予定だったが、急きょ「甲冑キララちゃん」への変更を思いついた。土浦に戦国武将が集結するとなれば、キララちゃんも黙ってはいられまい。勇ましい鎧よろいを付け、いざ出陣。でも、女の子だからピンクの鎧で女子力は温存のほりばた。幟旗のぼりばたには土屋家の家紋を入れた。婆羅展への来訪者が、甲冑キララちゃんに気付くと、歓声を上げて記念撮影をしていた。そんな光景が何よりも嬉しい。

今回の博物館の試みは、博物館と行政はもちろん、スタンプラリー協賛店となった商業者や我々民間も加わり、多くの人たちで盛り上げることができたと感じている。大きなパネル板に武将たちの似顔絵を描いてスタンプ台横に展示した「^{ちやうちん}提灯の松屋」さんでは、記念撮影をする行列ができたほどだ。ここ土浦に住む誰もが、こうした「ようこそ！土浦」のおもてなしの気持ちを常に持ち続け「ふるさと土浦」を大切にしてくれることを心から願っている。（NPO法人まちづくり活性化土浦 小林まゆみ）



コラム(24)ーPR下手を克服するためにー

民間ゲーム会社との共催も話題となった特別展「婆羅たちの武装」には2万8千人を超える来場者がありました。展示会の準備中、ゲーム会社の方から、「情報を小出しにしながら話題性をつくることもポイントです」と教えてもらいました。実際、インターネット上で少しずつリリースされる情報が、個人のブログやツイッターなどで取り上げられ、展覧会情報が広がっていったようです。

今回の展覧会では初めて有料広告も出しました。ひとつは茨城県南部で配布されている情報誌に、もうひとつは全国の書店やコンビニに並ぶ歴史系の雑誌です。前者は近隣の人々に展覧会イベントを広く知ってもらうことを念頭に、後者は「戦国武将と家紋」の特集号だったことから、ピンポイントで戦国ファンの目にとまることを想定しました。実際、両誌をみて来館してくださった方がいたようです。

PR下手と指摘されることの多い博物館ですが、今回の経験をもとに効果的なPR方法を考えていきたいと思えます。（萩谷良太）

情報ライブラリー更新状況

【2013・7・2現在の登録数】

古写真 512点(+5)
絵葉書 419点(+5)

※()内は2013年5月14日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞(かすみ)

2013年度

夏季展示室だより(通巻第24号)

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

FAX 029-824-9423

<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php?code=43>

1~6ページのタイトルバック(背景)は、

博物館2階庭園展示です。

2013年度夏季展示は、2013年7月2日(火)~9月25日(水)となります。「霞」2013年度秋季展示室だより(通巻第25号)は10月1日(火)発行予定です。次回のご来館もお待ちいたしております。

※展示室だより「霞」は当館ホームページからもご覧になれます。(カラー)